【土木史研究　第15号　1995年6月　自由投稿論文】

中国古代の土木思想についての一考察
（禹の治水・国造り思想）
A Study of Ancient Chinese Thought for Civil Engineering

藤田 龍之*・知野 泰明**
By Tatsushi FUJITA and Yasuaki CHINO

要　旨

近年、わが国に河川工事において、自然を壊すことのない工事が要求されるようになってきた。いわゆる「多自然型川づくり」である。この、「川づくり」の中で最も重要な治水について、その思想的背景はどのようなものであったかについて考察を試みた。中国において国造りの基本は「治水」であると言われているが、その伝説的な人物として「禹」が上げられている。禹は夏王朝の祖と言われているが、その存在は明らかにされてはいない。しかし、「書経」を始め『孔子』、『孟子』など多くの歴史書、思想書に「禹」が取り上げられている。そこで種々の文献を引用し中国古代の思想家が「禹」をどのように評価し、また治水、土木をどのように考えていたのかについて検討を試みた。

1．まえがき

中国においては「黄河を征する者は天下を征する」というような言い伝えがあるように、「治水」が国を治めることに通づることであった。例えば、司馬遷の『史記』にある「河渠書」、班固の『漢書』にある「溝洫志」など始め正史には治水、河川、運河など土木に関することが重要な事柄として記載されている。そこで、中国において「土木」をどのように考えていたのか、「中国古代の土木思想」と云うべきことを種々の文献から検討を試みた。引用が多く、また非常に長くなっているが、正確さをきするためである。なお、引用は全て『新釈漢文大系』・明治書院によった。

2．国土建設の理想像としての「禹」

中国において「治水」というと、まず第一に「禹」という人物が上げられている。禹は夏王朝の始祖と云われているが、夏王朝そのものの存在は未だに確認されてはいない。禹が『書経』をはじめ多くの文献に登場するのは、治水工事に成功して、自然の脅威から人民を救くい、中国の国造りの祖であるという言い伝えがあるからである。禹が伝説上の人物であるかどうかはこの論文では触れない。中国の古代文明は黄河流域に沿っている。従って黄河の治水は国を治めるには欠くべからざる事といえよう。禹が歴史的に存在したか否かかは別として、禹が中国人にとって治水の神として言い伝えられてきた。そこで『書経』を始め、『孔子』、『孟子』、『墨子』まど種々の中国古典から「禹」に関するところから、特に治水に関連するところを引用し、中国古代の思想家が「禹」という人物をどのように評価していたのかを調べ、「禹の治水」と「国造りの思想」、つまり、「古代中国の土木思想」について検討を試みた。

1）『書経』にある「禹」について

『書経』は、五経（易、書、詩、礼、春秋）の一つで中国古典では『詩経』と並んで最も基本的文献であり、古典中の古典と云われている文献である。『書経』は、古くは単に『書』といわれ、その意味は「書か

*正会員 工博　　日本大学教授 工学部土木工学科 （〒963 郡山市田村町徳定字中河原１）
**正会員 博（学術）日本大学工学部助手 土木工学科

れたもの」あるいは「記録」ということであるろう。『尚書』という名称もある。内容は大筋としては政治思想であって、士大夫階級の必須の教養書とされていた。『春秋左氏伝』、『國語』をはじめ『孔子』、『孟子』はもちろん、『墨子』、『呂子春秋』など儒家以外の文献にも多く引用されている。この中からまず基本文献となる『書経』から「禹の治水」に関する部分を引用し考察する。

○　『書経』　皋陶謨

帝と禹と皋陶との問答

帝曰、「來、禹。汝亦昌言。」禹拜曰、「都、帝。予何言。予思日孜孜。」皋陶曰、「吁、如何。」禹曰、「洪水滔天、浩浩懐山襄陵、下民昏墊。予乘四載、随山刊木、暨益、奏庶鮮食。予決九川、距四海、濬畎澮距川、稷播庶艱食鮮食、懋遷有無化居。烝民乃粒、萬邦作乂」。

【通釈】　帝はいう。「さあ、禹よ、汝も昌言せよ。」禹は拝していう、「ああ、帝よ。予は何も申しあげることはありません。予は日々孜々として自分の任務に勉めることを思っております。」そこで皋陶がいう、「ああ、それはどういうことでございますか。」禹が答えていう、「洪水が天道を乱し、浩々と広がって山を懐み陵にまで上って、人民は水に陥ったり溺れたりしました。そこで、予は四つよ乗物、舟、車、橇、輦に乗って天下をかけめぐり、山を堕ちて水路を開き木を刊り倒して水を導いて洪水を治め、益と協力して下民にもろもろの新鮮な鳥獣の肉を進めました。また、予は九川を開いてその水流を海に至らせ、畎澮（みぞ）を深くしてその水流を川に至らせて農耕地を治め、稷と協力して諸の饎食（煮て食べるもの）・鮮食（新鮮な野菜）を播いて人民の食糧が足り、また、有無（ありあまると乏しいと）の貨儲（貨物のたくわえ）を貿遷（交易）して産業が盛んになるようにしました。これで衆民の生活は安定し、万邦は始めて治まることでがざいましょう。」

○　『書経』　禹　貢　　序

禹敷土随山刊木、奠高山大川。

【通釈】　禹は耕地を布きつらね、山を堕して水路を開き、木を刊り倒して水流を通じ、高山の鎮まる所、大川の流れる所を定めて、中国の水土を治めた。

○　『書経』　禹　貢　第十二節　結　語

九州攸同、四隩既宅、九山栞旅、九川滌源、九澤既陂。四海會同、六府孔修、庶土交正、底慎財賦、咸則三壤成賦。中邦錫土姓。「祗台徳先、不距朕行。」

【通釈】　九州はこれまで述べた禹の功によって平らかに治まり、四方の人の居るべき地には衆民が住みつき、九州の名山には雑木、雑草などを刊り払って道が成り、九州の大川は水源を通じてよく流れ、九州の大沢には堤防が設けられて水を湛えるようになった。そこで、四方のはての夷（外族）も中国に集まって来て、六府（水・火・金・木・土・穀の諸種の貨物）が大いに豊かに修まり、九州諸地の土質がそれぞれ正され、それに従って財賦（貢・筐など）を出し、いずれも上中下、三等の土質によって賦（税）が定められた。かくて、中国の諸侯には土（領地）と姓とが与えられた。そして、禹は「わが徳先として勤めたことを敬い、わが定めた道を拒げるな」と命じた。

『書経』については『古文尚書』やその他の諸編があるため、禹については「皋陶謨」、「夏書」あるいは「益稷」、「禹貢」などに出てくる。まず始め、皋陶謨に舜帝との問答で、禹は昌言の中で治水こそが邦造りの本質であると述べている。この治水の具体的な内容については、次に示した禹貢に詳しく出てくる。

ここでは、「禹」が行った全般的なことを序で示し、以下第一節冀州、第二節兗州、青州、徐州、揚州等と続き、禹が行った治水、土木工事等に関することが記述され、「結語」にはこれらの結論を述べている。これらには、治山、治水などの土木事業を立派に成し遂げ、民衆に安心して住むことのできる国土を与えた者が国を治める資格が有るという、古代中国の基本的な考え方が現れており、これを最初にやり遂げたのが「禹」であるとしている。「禹」は国土建設にとって理想とすべき人物であり、これ以後はこの思想に従っていくべきであるということを示している。この『書経』の「禹」についてのさまざまな記述が、その後の

『論語』、『孟子』、『荘子』、『墨子』、『淮南子』や、その他のさまざまな文献に現れ、それぞれの思想家が治世者の理想像とし種々の解釈をしている。特に、儒家や墨家は『書経』を引用していることが多い。また、『史記』、『漢書』などの歴史書に「禹」の人物像が書かれている。これらの文献のなかから「禹の治水思想」に関係すると考えられることを上げ、儒家、墨家などの中国古代の思想家が「禹」をどのよう捉えていたのかを考察する。

2）『論語』、『孟子』、『墨子』にある「禹の治水」

『書経』は儒家によって伝承されていたといわれていることより、当然これを引用して、その思想的展開をみせている。その中より、「禹の治水」にしぼって関係するところを引用する。

○ 『論語』 泰伯

子曰、禹吾無門然矣。菲飲食、而致孝乎鬼神、惡衣服、而致美乎黻冕、卑宮室、而盡力乎溝洫。禹吾無門然矣。

【通釈】 孔子言う、禹の天子としてのやり方については避難すべき欠点がない。自分の食事をきりつめて、祖先の祭りの供え物を豊富にして孝道をつくしている。自分の日常の衣服を粗悪にして、以て黻冕などの祭服を立派にすている。自分の住居を簡素にして、田間の灌漑水路の整備に全力を尽くしている。要するに、わが身に奉ずることをうすくして、祭祀とか、人民のためとこに財を用いている。禹のこのようなやり方をみては、一言も非難すべきものがない。

○ 『墨子』 兼愛

古者禹治天下、西爲西河漁竇、以泄渠孫皇之水。北爲防原泒、注后之邸。嘑池之竇、洒爲底柱、鑿爲龍門、以利燕代胡貉與西河之民。東爲漏大陸、防孟諸之澤、灑爲九澮、以楗東土之水、以利冀州之民。南爲江漢淮汝、東流之注、五湖之處、以利荊楚干越與南夷之民。此言禹之事。吾今行兼矣。‥以下略‥‥

【通釈】 むかし禹が天下を治めるにあたっては、西方漁竇をおさめ、渠孫皇の水を排出した。北方は原水泒水の二川に堤防をつくり‥‥中略‥‥これは禹が兼愛・交利を行ったことを言ったのであって、自分はいまその兼愛のことを行わんとするのである。‥‥以下略

○ 『孟子』 滕公章句上

當堯之時、天下猶未平。洪水横流、氾濫於天下。（中略）禹疏九河、瀹濟漯、而注諸海、決汝・漢排淮・泗、而注之江。然後中國可得而食也。當是時也、禹八年於外、三過其門而不入。雖欲耕得乎。

【通釈】（孟子の語はつづく。）「堯の時に当って、天下はまだすっかり平穏にはなっていなかった。（中略）禹には水のことをつかさどらせたが、禹はさっそく、黄河下流の九つもの河をよく水が通じるようにし、済水・漯水を切り開いて、その水を海に流しこみ、汝水・漢水を切りひらいてよく通じるようにし、淮水・泗水をさらえて、その水をおし流し、揚子江に注ぎこんだ。このようにして始めて、中国は五穀もよく実り、民衆は食うに困らないようになったのである。この時に際し、禹は洪水を治めるために、外にいること八年、その間に、三度ばかり自分の家の門前を通り過ぎることがあったけれども、それでも一度も門内に立ち入るなどの暇はなかった。このように民衆のために、治水に全力を尽くして忙しい時などには、いくら耕したいと思い願っても、どうして耕すことが出来ようか、出来はしないのである。」

○ 『孟子』 滕公章句下

公都子曰、外人皆稱夫子好辯。 （中略） 書曰、洚水警余。洚水者、洪水也。使禹治之。禹掘地而注之海、驅蛇龍而放之菹。水由地中行。江・淮・河・漢是也。險阻既遠、鳥獸之害人者消。然後人得平土而居之。

【通釈】弟子の公都子がいうに、「門人以外の世間の人達は、皆先生のことを、弁論を好む者だ、といっています。（中略）書経には、その時の堯帝の言葉として、『天が洚水をくだして、我をいましめた。』

と書いてある。洚水とは、洪水のことである。（以上が一乱の例である。）そこで、堯は禹に命じて、この洪水を治めさせた。すると、禹は地を掘り割って、氾濫している水を海に流しこみ、蛇龍をかり出して、草深い沢地へ追いやってしまった。このように処置した結果、水は掘り割った地中両涯の間を流れて行くようになり、洪水の害は全く除かれた。こうして出来た流れが、今日の揚子江・淮水・黄河・漢水である。このようにして、洪水氾濫の危険も、もはやすっかり遠のき、鳥獣の人を害する者も全く消えてしまった。そこで始めて、人々は安定した平地を得て、そこに居住するようになった。（以上が一治の例である。）」

○ 『孟子』 離婁章句下

孟子曰、天下之言性也、則故而已矣。故者、以利爲本。所惡於智者、爲其鑿也。如智者、若禹之行水也、則無惡於智矣。禹之行水也、行其所無事也、如智者亦行其所無事、則智亦大矣。天之高也、星辰之遠也、苟求其故、千歳之日至、可坐而致也。

【通釈】孟子がいうに、「天下の人々で、人の本性を論ずる者は、誰でも皆、過去の経験的事実を基礎にして論を立てているだけにすぎない。ところで、その過去の事実とは、順利即ち無理な推量をせず、せんさく立てもせず、自然のありのままの姿を見て、その事実の根本的なものとすべきである。（この立場からすると、どうしても人の本性は善ということになる。）さて一体、智のいやがられる点は、あまりにもせんさくしすぎて、自然のままの姿を見ないからである。もし智者であって、禹が水を疏通したように智をめぐらし、物を考えるならば、智は悪むどころか、誠に尊いものである。即ち禹が水を疏通したやり方は、すべて無理のない自然の勢（なりゆき）にまかせて水を導いたのであって、もし智者が亦そういう無理のない自然なやり方で、智を用いたならば、智の効用も亦大きなものといわねばならぬ。たとえば、あの天は高く、星は遠いが、無理のない自然な道理にかなって智を用い、いやしくも過去における自然のままの事実をしらべ考えて、それを基礎として計算を進めていったならば、千年後もの冬至の日だって、坐ったままで算出して知ることが出来るのである。」と。

○ 『孟子』 離婁章句下

禹・稷當平世、三過其門而不入。孔子賢之。

【通釈】 禹や稷は、太平の世に当って、洪水を治めたり、農事を民に教えたりする職務に忙しく、いつも外で働いていて、三度も自分の家の門前を通り過ぎたが、一度も家の中へはいる暇もなかった。孔子はこれを賢者だとほめている。

○ 『孟子』 告子章句下

白圭曰、丹之治水也、愈於禹。孟子曰、子過矣。禹之治水、水之道也。是故禹以四海爲壑。水逆行、謂之洚水。洚水者、洪水也。仁人之所惡也。吾子過矣。

【通釈】 白圭が言うに、「自分の治水の功は、禹の治水よりまさっている。」と。これをきいて孟子が言うに、「あなたの言うことは、まちがっている。禹の治水のしかたは、水の流れる道に順い、すなおに水を流しやったのである。それゆへ、禹は四方の海を水の流れ入るたにとして、そこへ水を注いだのである。ところが、今あなたは隣国をもって谷とし、そこへ水を流し入れたのである。（つまり洪水を隣国へ押しつけただけなのである。）下流がふさがっているため、水が上流に向って逆流するのを洚水と言う。洚水とはいわゆる洪水のことである。この洪水は仁者の悪むところのものである。（しかるにあなたは曲防をつくって水を逆流させ、隣国に注ぎ去るようなことをした。）あなたの考え言っていることは、まちがっている。」

これら孔子、孟子にしても墨翟にしても禹の治水・治山によって国土を安定させ、人民ために自分自身を無にして国を治める姿勢を国政の理想形としている。この中で『孟子』の告子章句下にある、自国の洪水を防ぐこと、例えば自国側の堤防を高くして洪水から守ることはよいが、それによつて他国がその影響を受ける、つまり、洪水を他国に押しつけるような治水は本当の治水ではない。と述べている。このことは、日本

の河川とは違って、ヨーロッパ、アジア、その他の大陸にある国際河川の治水計画にとっては現在でも通ずる治水思想であろう。その他の文献もほぼ同ように禹を記述している。特に墨翟は兼愛非攻主義から城壁を堅牢にして国土を守るという思想を貫いたと言われているが、そのため強力な土木技術集団を形成した。このため禹を治政の理想とし『墨子』にはしばしば「禹」が登場している。つぎに、その他の文献から禹について関係するようなところを引用する。

3）その他の文献にある「禹」

○　『荘子』　雑編　天下

墨子稱道曰　昔者禹之湮洪水決江河、而通四夷・九州也、名山三百、支川三千小者無數。禹親自操橐耜而九雜天下之川、腓無胈脛無毛、沐甚風櫛疾雨、置萬國。禹大聖也。而形勞天下也如此。使後世之墨者、多以裘褐爲衣、以跂蹻爲服、日夜不休、以自苦爲極、曰、不能如此、非禹之道也。不足爲墨

【通釈】　墨子は自分の学説について次にように言っている。「昔、禹は洪水をふせぎ止め、長江や黄河の流れを切り開き、四方の夷狄や中国全土に交通の道を作り、名ある山は三百、川の支流は三千、その他の小さいものは数え切れなぬ程の工事に従った。禹は自分から耜などを手にして仕事にたずさわり、天下の川を集めて大きな川に流れこぬようにした。そのためにひくらはぎやすねに毛がなくなり、はげしい風に吹きさらされ、ひどい雨を頭からあびて、国々の境を定め別けたのである。禹は大聖人である。それにもかかわらず、天下のため、これほどまでにその肉体を苦労させたのである。」と。そして後の世の弟子たちに、粗末な衣服を着せ、木や草で作った履物を用いさせ、夜も昼も休むことなく働かせ、苦労を最上のことと思わせた。そしてまた言う、「このようなかとができなければ、禹の道ではない。墨家の徒となるに足らない。」と。

ここで、『荘子』の書は周代の荘周の著といわれている。その思想は「完全自由の境地を求める」ことであった。一般には老子と共に老荘の思想といわれ、無為・自然を道徳の標準として、虚無を宇宙の根源としている。荘子が墨子の学説を説いているところであるが、「禹」対する墨子の姿勢を非常に良く現していると云えよう。

○　『管子』巻第二十　　形勢解第六十四

神農教耕生穀、以致民利。禹身決涜、斬（塹）高橋（喬）下、以致民利。湯・武征伐無道、誅殺暴亂、以致民利。故明王之動作雖異、其利民同也。故曰、萬事之任（生）也、異起（趣）而同歸、古今一也。

【通釈】神農氏は人民に農耕の技術を教えて穀物を生産し、それによって人民の利益を生み出した。禹王は自分から用水路を掘り、高い土地は切りくずし、低い土地は埋めたてて、それによって人民の利益を導き出した。湯王と武王は無道な賊を征伐し、乱暴を働く悪人の罪を責めて死刑にし、それによって人民に利益をもたらしたのである。すなわち賢明な王者の行為はそれぞれに違ってはいても、人民に利益を与えたことにおいては同じである。それゆえに、「すべての物事は、考え方は違っていても、帰着するところは同じであって、これは昔も今も変わらぬことである」と言われるのである。

○　『荀子』巻第十八　　成相篇第二十五

禹有功、抑下鴻、辟除民害、逐共工、北決九河通十二渚疏三江。禹薄土、平天下、躬親爲民行勞苦、得益皋陶横革直成爲輔。

【通釈】禹は治水に専念し、洪水を治めて民衆の苦しみを除き、悪い共工を放逐し、北方で九河を切り開き、十二の中洲を掘り除いて疏通させ、三江の流れを良くした。禹は全土を分かち治めて天下を平安にし、自ら民衆のために活動し労苦し、益・皋陶・横革・直成らの賢者を挙用して輔佐とした。

○　『論衡』　順鼓第四十六

夫堯之使禹治水、猶病水者之使醫也。然則堯之洪水、天地之水病也、禹之治水、洪水之良醫也。説者何以易之。

【通釈】堯帝の出会った洪水は、春秋経の大水に当たる。堯帝はこのことをよく知っていたから、神に祈らず、政治を改めたりせずに、禹に治水を命じて、多くの川が東方に流れ出した。そもそも堯帝が禹に治水を命じたのは、水に苦しんでいる患者が医師の助けを借りるようなものだ。すると、堯帝の時代の洪水は、天地の水に悩む病気であったし、禹の治水作業は、洪水を治める良医であった。この説明は変えられまい。

○ 『准南子』 巻八本経訓

舜之時、共工振滔洪水、以薄空桑。龍門未開、呂梁未發、江淮通流、四海溟涬。民皆上丘陵、赴樹木。舜乃使禹疏三江五湖、闢伊闕、導廛澗、平通溝陸、流注東海、鴻水漏、九州乾、萬民皆寧其性。是以稱堯舜以爲聖。

【通釈】 舜の時、共工（水官）が洪水を引き起こし、空桑の地までおし寄せた。〔その当時〕龍門・呂梁（山西省の山名）とも切り開かれておらず、長江と淮河の水が合流し、天下は一面水びたしとなって、民はみな丘陵や樹上に避難した。舜は、禹に命じて、三江五湖の水はけをよくし、伊闕（河南省の山名）を切り開いて、廛水・澗水の流れを導き、運河を縦横に設けて水を東海に流した。かくて洪水はひき、九州全土は乾き、万民はみなその生に安んじ得るようになった。そこで人人は堯舜を聖王と称したのである。

○ 『准南子』 斉俗訓

禹之時、天下大雨。禹令民聚土積薪、擇丘陵而處之。‥‥中略‥‥禹遭洪水之患、陂塘之事、故朝死而暮葬。此皆聖人之所以應時　變、見形而施宜者也。

【通釈】禹の時天下に大雨があり、禹は人民に命じて土塁を築き、薪を積み上げ、また丘陵を択んでそこに避難させた。‥‥中略‥‥禹は洪水の難に遭い築堤の事に当たっていた。そこで朝死ぬ者があれば、夕方には埋葬したのである。これらは皆、聖人が時勢に対応し変化に適合して、形勢を見抜き正しく対処した実例である。

○ 『准南子』 巻九主術訓

禹決江疏河、以爲天下興利。而不能使水西流。稷辟土墾草、以爲百姓力農。

【通釈】禹は江・河の治水につとめ、天下のために利を興したが、しかし、水を西方に逆流させることはできない。后稷は荒地を開き雑草を苅って、万民のために農事に挺身したが、しかし、穀物を冬生じさせることはできない。

○ 『准南子』 巻18人間訓

古者溝防不脩、水爲民害。禹鑿龍門、辟伊闕、平治水土、使民得陸處。

【通釈】昔、用水路や堤防は整わず、水害は民を苦しめた。そこで、禹（夏の始祖）は龍門を開鑿して河を拡げ、伊闕の山をきり拓き流れ易くし、水土（自然環境）をおだやかにして、民が安心して陸に住めるようにした。

3．むすび

これまで述べたように「禹」は伝説上の人物であろうが、中国古代の歴史書をはじめはほとんどの文献に出現し、どの書にも「禹」が国を治める者の理想としている。中国の土木と言うとすぐ「万里の長城」が思い出されるが、これはハードの面で、ソフトの面からみると、黄河の治水を始め土木的な方法論、即ち土木思想が重要な問題となっている。わが国においても江戸時代の治水に関する書物、例えば、『治水要辨』、『地方凡例録』などにも「禹」について書かれたものが残されており、治水に関する思想的な背景ともなっている例もある。

【参考文献】：吉川幸次郎全集　第八巻　『尚書正義』　筑摩書房
中国古典文学大系　『書経・易経（妙）』　赤塚忠約　平凡社